

島崎 貴治 論文内容の要旨

主 論 文

Risk factors for death among hospitalised tuberculosis patients in poor urban areas in Manila, The Philippines

フィリピンマニラ貧困地区の病院に入院した結核患者の死亡危険因子に関する研究

島崎 貴治 S.D.Marte N.R.D.Saludar E.M.Dimaano E.P.Salva
有吉 紅也 J.B.Villarama 鈴木 基

The International Journal of Tuberculosis and Lung Disease
17 卷 11 号, 1420-26 頁, 2013 年

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 新興感染症病態制御学系専攻

(主任指導教員：有吉 紅也 教授)

【緒 言】

結核は、世界規模で蔓延する最重要感染症のひとつであり、年間約 900 万人が発症し、約 150 万人が死亡している。近年、HIV・エイズ患者間での拡大や多剤耐性結核の出現など新たな課題を抱えている。フィリピンは、世界の 8 割の結核患者を抱える 22 の高蔓延国に含まれており、結核は国内死亡原因の第 5 位である。また、結核患者における HIV 感染の割合は限局的であるにもかかわらず、新規結核患者における多剤耐性結核率は 3.8%と世界平均の 2.9%より高い。一方、結核高蔓延国における結核病棟入院患者の院内死亡に関する研究はほとんどなく、フィリピンを含めた東南アジアからの報告はない。そこで、本研究ではフィリピン、マニラ市内にある国立感染症病院へ入院した結核患者の特性および死亡率を明らかにし、死亡に関する危険因子を解析することを目的とした。

【対象と方法】

マニラ市内貧困地区にある国立感染症病院結核病棟へ、2009 年 10 月 1 日から 2009 年 12 月 31 日までに結核と診断され、HIV 感染が除外されたすべての 13 歳以上の入院患者を対象として後ろ向き研究を行った。年齢、性別、経済状況、既往歴、身体所見、検査所見、治療経過などの患者情報は、病院診療録と検査室記録より系統的に収集した。死亡率は退院時の生存状態を調べ算出した。死亡退院に関する危険因子についてはロジスティック回帰分析を用いて単変量および多変量解析を行った。

【結 果】

調査期間内に結核病棟へ入院した患者 407 例のうち、403 例より情報収集が可能で

あった。年齢の中央値は41歳であり、男性が66%を占めていた。患者の88.6%は貧困層であり、Body Mass Index (BMI)の中央値は16.8 kg/m²であった。症状出現から入院までの期間が3か月以上であった患者は26.2%であった。退院時診断は肺結核(82.4%)、肺外結核を伴う肺結核(12.4%)、肺外結核(5.2%)の順であった。また、139例(34.5%)は細菌性肺炎の合併があると診断されていた。死亡退院は151例であり、院内死亡率は37.5%であった。内45例は入院第2病日以内に死亡していた。多変量解析の結果、死亡退院に関係する危険因子として、細菌性肺炎の合併、食欲低下、ヘモグロビン値10g/dl未満の貧血、年齢50歳以上が、補正後オッズ比がそれぞれ4.53, 3.01, 2.35, 1.85と有意に死亡と相関していた。一方、喀血・血痰を主訴に入院した症例では、補正後オッズ比が0.44であり、死亡率が有意に低かった。

【考 察】

マニラ市内貧困地区の結核病棟における院内死亡率は、これまでの報告例と比べても著しく高値であった。入院患者の3分の1の症例で細菌性肺炎の合併が診断されており、死亡率を4.5倍も高めていた。今回の研究により、結核高蔓延国の結核病棟入院患者において、細菌性肺炎の合併が死亡率へ影響していることが初めて示された。細菌性肺炎に対する抗菌薬の適正使用は、病原細菌の種類によって異なる。今後、結核に合併する細菌性肺炎の起炎菌を明らかにすることが、貧困地区における結核患者の院内死亡率の減少につながる可能性がある。また、予想に反して、喀血・血痰は院内死亡に対して保護的に作用していることが判明した。その理由として、これらの症状が、患者の早期受療行動を促したと考えられた。本研究結果により、従来から指摘されている受療行動の遅れに対する対策、栄養状態の改善や早期発見の重要性が改めて示された。